

獅子文六全集



朝日新聞社

獅子文六全集 第十三卷

全十六卷／第十六回配本

八百田

昭和四十四年八月二十日印刷發行

著者 獅子文六

装幀 芹澤銈介

發行者 大田信男

印刷所 凸版印刷

發行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

第十三卷／目次

読物(二)

巴里小唄 ジャネーマール(三三) ペベ物語(三三) 諏訪君の失敗(三七) ミスタンゲットは何故とし
とらぬ(四二) 恋人の恋人(四三) フォリー・ベルジュール潜入記(四五) 半処女物語(五三) 半貴婦
人物語(五九) 牛肉屋・ドン・ジュアン(六三) 西洋色豪伝(七四) 血と泥濘の事件(一二五) 立見席
の女(一二五) 欧亜二人旅(一三三) エロイズ物語(一四二) 椿姫をめぐる(一四九) 暴君ネロ伝(一五七)
女王クレオパトラ物語(一六四) シューボンの奴(一七三) 続「シューボンの奴」(一八八) 女と蜘蛛
とダイヤモンドの話(一九五) 横須賀物語(二〇三)

雑記(三五)

巴里のミュージック・ホール(三七) 女優五景(三六) 巴里の流行唄(三六) レヴィユウ小題
(三九) 脚の哀史(四四) ルウレットを回りに(四五) モンマルトルの散歩(五七) モンパルナス
界限(六三) フランス人の鼻唄(七〇) 裸島(七三) コキユの新型(七六) 寝台はフランスに限る
(七九) 新女性アフォリズム(八二) 世界一日本女(八七) 東西粹人伝序説(九三) 東西若夫婦考

(三三) 東西女性風俗(三〇) 日本劇(三一) 日本(三三) ビジャマ談義(三三) 水のルアイユ(三七)
ある巴里娘の話(三二) Tire-au flanc! (三三) 洋画回顧(三三) 上野見物(三六) チャップリン
先生(三三)

随筆(三七)

会話について(三六) ユーモアと諷刺(三三)

牡丹亭雜記 由来(三六) 和洋小噺(三六) 一日三枚の弁(三六) 番外(三七) シューボン拾遺

(三七) 早稲田とタイガース(三七) 片貝(三七) 悲観公子(三七) F君(三七) ラブレー遂に訳さ
る(三〇) 小さん(三八) 球場内外(三八) モデルの経験(三八) 夏の宵(三八) 異人観能図(三八)

初日の先生(三九) 二人のテニス選手(三九) 映画の「沙羅乙女」(三九) 水銀事件(三九) 或る
日の多摩川見物(三九) 栈敷の追想(三九) 葛飾花見(三九) 歳晚雜記(三九) 女性風俗時評(四〇)

奇夢(四〇) 愛国行進曲(四〇) ユーモア小説懺悔(四〇) 日本家屋(四〇) 本(四〇) Foujita(四〇)

ノーエルの記憶(四七) 文士の子(四七) 禁令謳歌(四七) 朝鮮と僕(四七) 町内の宰相(四七) 外

苑抄(四七) 二度目の巴里の話(四八) 三田山上の秋月(四八) 諧謔文学瑣談(四八) ユーモア文

学管見(四八) ユーモア小説と探偵小説(四八) 文学のいろいろ(四八) 映画に現われたユーモ

ア(四七) 映画雜感(四八) 諷刺映画小論(四五) 笑いと諷刺(四四)

牡丹亭新記 静かなところ(四六) ベルリンの大工さん(四五) ユーモリストの素顔(四六) 下

町の人々(四六三) 京都(四六三) 伊勢外宮(四六三) 人の顔(四六六) 五九郎(四六六) 旅の憂さ(四六六) ウチ
と握鮎(四七二) マッポー談義(四七三) 天草抄(四七四) 薩摩女(四七五) 読書回答(四八〇) 巴里の本屋
(四八二) 巴里のクリスマス(四八四) 或る時代の巴里の芸術家(四八四) 敵国アメリカ(四八七) ハワイ
の同胞諸君に(四八八) 上海の経験(四八九) レ・ミゼラブル(四九二) レヴィユウと禿頭(四九三) 古い、
古い映画の話(四九三) 新派の友(四九四) 中旬会の連中(四九六) 疔痕記(四九七) 私の町内(四九八) 北沢
楽天(四九九) 日記抄(五〇一) 颱風(五〇三) 生活の断片(五〇三) 蓄音機禍(五〇五) 朝酒(五〇六) 雨(五〇六)
馬の食費(五〇六) 道化役の東京人(五〇七) 前線への言葉遣い(五〇七) 美人転換(五〇八) 明治の御宇
(五〇八) 時局とユーモア文士(五〇九) 早耳(五〇九) あの日(五二二) 法隆寺壁画模写拝見(五二二) 映画
という食物(五二五) 短刀と少年のノート(五三三)

読

物

巴里小唄 ジャネーマール

随分と流行った唄である。

生まれた舞台はカジノ・ド・パリ。所演ミスタンゲット。
*。作詞はアルベエル・ヴィユメッツ及びジョルジュ・アルヌウル。作曲は有名なるモオリス・イヴァンであります。

いつかも本誌に書いたが、ミスタンゲットの「スケッチ」と云うやつ、レヴィユウのなかの劇、劇と云つても部分的に唄や踊りになる、なると云つてもオペレットやミュージカルコメディとはまるでちがう、そこが彼女ミスタンゲットの新家である劇、写実な科をしながら彼女が歌いだす唄、それから出た流行唄です。

だから、ただ文句を読んだんでは情がうつりませんから「ジャネーマール」の荒筋を話します。

セエヌ河の岸は立派な往来ですが、岸から石段を降りて水際の石畳まで行くとそこは別世界、ルンペン或いはそれ以下のプロレタリアの領分です。レットルのない葡萄酒の

壺を枕に臥てるのもあれば、橋の下で夜露を凌ぐために昼間から頑張ってる婆さんもいる。

それから名物の川船——

洗濯船。湯屋船。荷足船——みんな河岸に横たわっている。

船頭たちは勿論別世界の住民で、まあ普通、悪漢と考えられている。

舞台はそういう世界。石畳。古い街燈。荷足船。正面が河岸に沿って郊外へ出てゆく汽車の線路。そこへ性別不明なくらい汚い襟褌を着た若い娘が出てきます。荷足船で虐使されてる浮浪の娘です。これがミスタンゲット。いつもこの衣裳で「スケッチ」に現われるのは、チャップリンの故智を学んだのでしょうか。それからきつと一疋の老犬を連れてる。伝説としては、彼女の過去は真にかくの如きものであつて、くだんの老犬はその時代からの愛犬だと云いますが、まあ嘘でしょう。

余談は措いて、そこへまた若者が現われる。船頭でしょう——アバッシュ風の色男で、娘の方も憎からず思っているが、惜しいことに思想がよろしくない。現に今夜——後になりませんが、舞台は夜です。薄暗い——汽車の線路に大石を横たえて、列車の転覆を謀ろうとする。

しかし娘の方は後世ミスタンゲットになるくらいだから、健全な情操の持主で、涙と共にこれを諫めますが、聞きません。聞かないばかりでなく、遂に娘を川のなかへ

投げこんでしまいます。

ところがそれがホントの水で、ドボンと云う音がして水煙が立つから、見物はフームと感心しますが、ミスタンゲットの身になってみると、もう五十の婆さんで、年寄りの冷水は毒になる。

男の方はそれを見済まし、予定の如く線路へ石を横たえて去ります。舞台空虚。遙かに汽車の汽笛が聞える。見物心配。時なるかな、老犬の啼声消魂しく、見れば娘は犬に助けられて、岸へ泳ぎつきました。

満身濡鼠。岸へ匍い上るやいな、線路の土手目指して駆け昇ります。汽車の轟音は間近かに迫る。ウンウンウンと娘は石を押しますが、そこはなかなか手輕に動くようにできてない。汽車の轟音倍加。もういけないと思う時、やつと石が動きただしたと思う途端、ガラガラビイと、列車が通過する。

また余談で失礼しますが、いくらミュージック・ホールでも、本物の汽車は使いません。では丸物の汽車を使えばどうかと云うに、いかにも汽車らしくは見えますが、速力を与えることが不可能です。この時のカジノ・ド・バリの工夫は誠に面白く、列車は張物で——一枚の平面を切り抜いたもので、もし静止して見たら子供騙しみたいなものですが、途轍もない速力で走る。ガラガラビイと音がすると、お煤煙と火の粉と列車の窓の燈が一瞬間眼に映りますが、お

や汽車だなど思う時には、舞台には煙だけが残ってる——なんと素晴らしい急行の実感ではありませんか。

さて筋の方ですが、後は悪漢捕縛、浮浪の娘は表彰されて出世の緒を得て、おしまい。

これが普通の芝居なら、いくらモンマルトルでも通用しませんが、前にも云うとおり、ミスタンゲットの唄と踊りを眼目にして、見物は満足します。そこでこの「ジャン・マール」を何所で歌うかと云うと、最初一人で身の上を啣つ時、それからアバッシュの男に脅迫される時に歌います。

一体流行唄は大抵そうですが、ことにこの「ジャン・マール」は巴里の俗語が頗る多く、それで韻が踏んであるところが面白いのです。

(一)

いつもだんまりよ あたしはいやよ
我慢に我慢が あきあきなだよ

けれど

どうせ独りのあたし
来る日逝く日を涙

ああ死ぬのはいやよ

それ程なら 大きい声で

稼いでも稼いでもよ ジャネーマール

あの人があの人によ ジャネーマール
宵から朝まで追い使う

めあてもなく夢もなく

着物はいつもぼろぼろよ ジャネーマール

ああああああああああ ジャネーマール

ちよいとは文句も云いますわ

あんまりよあんまりよ ああジャネーマール

(二)

羨むどころか、金持なんぞ

立派な暮しも あたしは平気

けれど

あまりみじめなあたし

来る日逝く日が不運

ああ苦しむだけよ

それ程なら 大きな声で

稼いでも稼いでもよ ジャネーマール

あの人があの人によ ジャネーマール

宵から朝まで追い使う

めあてもなく恋もなく

あるのはいつも犬ばかり ジャネーマール

ああああああああああ ジャネーマール

ちよいとは文句も云いますわ

あんまりよあんまりよ ああジャネーマール

昭和四年六月 『新青年』

ペペ物語

ムーラン・ルージュの立見場

春は花、秋は紅葉もみぢのそれならで、賑わい絶えぬ四季の里……という風に書き出しても、一向に不調和ではないモンマルトル。とりわけサクレクウル寺の鐘の音に、夜色俄かに湧き上つてからは、昔ながらの煙花えんかの巷で、ただ瓦斯のイルミネーションが、ネオンサインに変わったぐらい。

——閑ひまだねえ。

——ほんとにさ。その癖、補助椅子ストロークンが出るほどの入りなんだよ。

ミュージック・ホール「赤風車」ムーラン・ルージュでは、その夜の番組も既に半程まで進んで、舞台も観客席も充分に脂の乗った中に入り前、馬蹄形の平土間の後方を、ぎっしり取り巻いた立見場の、そのまた後方を見ると、燈火の光りも暗く、人影も疎さからで、忙中有閑を絵に描いたよう。

その、ちらほらの人影をしらべてみると、劇場へ入っても舞台は見えないで、見物の紳士諸君に用向きを持った「令嬢」たちばかりで、いずれも肩と衿えりをぐつと挟えった、夜会服に、頸飾りの真珠は擬いであらうとも、靴下は薄墨色の本絹をきりりと履いた小粋な姐さん達。夜会服に帽子を被ったのは機に応じていつでも往来へ飛び出せる用心と知れる。所在なさに顔でもなおすためか、ぱちんと開けた手提の中を覗き込んでみると、くしゃくしゃになったハンケチとコンパクトと小銭……それから青いカアドのようなものがちらと見えるが、これは野暮な紙白粉ではなく「赤風車」の定期入場券である。

何の商売でも縄張りはあるもので、ブウルヴァルを流して歩く女達がそっちが閑で、「赤風車」へ闖入しようとして云つても、そうは行かない。そもそもこの青い定期入場券を手に入れるには、それ相当の手数もあり資格も要る。また一度「公認」された上たりとも、枕探しなんて下卑た行為が表、方の耳にでも入れれば、忽ちパスを取り上げられてしまふ。いやしくも「赤風車」の女たるものは、正直に、合法的に客を絞る……とまあ、看板はそうなっている。

そんなわけで、闖入者は、彼女等の商売から云つても、意地から云つても、憎悪と軽蔑の白眼を避けるわけに行かない。

——この頃はもうも風儀が悪くなっていけないよ。

と一人がバツプで、鼻の頭を叩きながら、隣りでぼんやり壁に凭れている仲間に話しかけた。

——先刻なんか、あれや確かに素人じゃないと睨んでいるんだが、半分あたしの方へ出来かかってるお客を、ちよろりと横から攫っちゃったのがあるんだよ。

——憎いねえ。

——気がつかなかったかえ。小柄で、プロンドの見たところ極く初心っぽい……そうそう、カトリネットだったよ。

——カトリネットなら、今夜はずいぶん入っているからね、どの女なんだか……。

旧教の暦で、今日は聖カトリヌの祭りにあたる。その日の夜は、今年廿一歳を迎えた娘たちに限って、前髪に白レエスのボンネを掛け、夜の巷を歩いてゆけば、生涯の幸福を与えてくれる良人に邂逅するという……そんな習慣が未だに残っているんだから巴里は古風な都だというのである。で、その白いボンネの娘さん達をカトリネットと呼ぶ……。

——考えてみれや、閑な筈さ。聖カトリヌの晩だもの。ほんとにこのお祭りばかりは、いい加減こっちの商売の邪魔だねえ。

——一年一度だから、いいようなもののね。

——まったくさ……。おや幕間だよ。

——おや、もうそんなかね。

——ぱつと一時に場内が明るくなると、案内女が一斉に八の字に扉を開いた後から、われもわれもと見物の大部分は、廊下へ流れ出してくる。バアでは遽かにジャズがはじまって、林の如く突つ立ったギヤルソンが、手ぐすね引いて客を待っている。オランジャアド、二つ！ コアントルウ、三つ！……見る間に、テーブルは塞がって、紫煙棚引く間に、エトランジェの英語が、声高にチイチイバアバア。「赤風車」の令嬢が、グット・イヴニング・サア——と怪しげな発音で話しかけると、ボン・ソアール・マドマゼエル……と對手も抜目はない。

——例の二人の売れ残りは、廊下を一回りしてきたが、これという目星い對手も捉はず冬の池の鴨みたいに肩を窄めて、最後の獵場をバアへ求めてきた。見渡したところ、恰好な位置に明きテーブルもないので、壁際のテーブルに、独身者らしいじむさい男が、一人でボックスを傾けてる両隣りへ、遠慮なく坐り込んだ。

——こちら、此間の様子のいいアメリカ人に、とても似てらっしゃるわね。

——あら、ほんとに、まるで瓜二つ……

——なんて、聞えよがしに私語いて誘いをかけてみても、なんとという唐変木なんだか、苦り切った顔をしてそつぽを向

いている。こんなのには掛かり合つてると、飲料代まで背負い込むかもしれない。なんて不景氣な晩なんだろう、と一人が舌打ちをしながら、見るともなしに正面を見回したが、急に、對手の手を引張つて、

——あれ、あれ、あの女よ！

——なにき、吃驚するじゃないの。

——ほら、ほら、今男と二人で出て行くわよ……いやに小娘振つて、御覽なさい、ぶら下るように男の腕に縋つてゐるわ、あいつなのよ、さっき私のお客を横取りしたのは……。

見るから好人物そうな四十男で、こういうのを童顔と云うのか、色艶のいい丸々しい顔の、鼻の下にも、脳天にも毛は一本も生えてないかわりに、懐ろ工合の方は大分潤沢らしい様子が、上品に着込んだ紺の英国地のダブル・ヴェストの膨らんだ腹のあたりに隠される。

それにびったり寄り添つて、甘ったれた上眼使い、こぼれるような愛嬌を小さなハート型の唇に見せて頻りに何か楽しそうに話しかけてゐる女の様子は、まことに無邪氣なもので、小柄なせいにか十六、七に見えるものでもないが、短い金髪の額にかけた白レースは、彼女が幸福なカトリネットの齢に達した事を語っている。プロンドの常として、蒼むばかりに雪白の肌ながら、慎ましく肩を隠した青磁色のロオブは、すんなりと優しい肉付きの腕だけを、露わに

人目に曝している。美人と云うには、まだ花の開ききらない感じで、そのかわり厚ぼったい嫌らしさは微塵もなく、いかにも若々しく、軽快な趣きがある。それに青く澄んだ眼の動きがきびきびして、並々ならぬ才氣が仄見えるから、一寸見の世擦れぬ様子が真実とすれば後世恐るべき部に属さねばならない。

二人は人波を掻き分けて、バアの出口の方へ歩いて行つたが、男が、何か一言二言囁くと、女は小鳥のように一寸首を傾けた後、愛嬌よく頷いて見せた。それなり二人は、座席へ帰ると思ひのほか、反対に携帶物預場の方へ出て行つた。そこで男はまず彼女に外套を着せてやつてから、自分のラグランは小脇に抱えたまま、手を執つて入口の扇形の階段を降りて行つた。

外はクリシイ大通り。午後十時はまだ宵のうちで、岩間に堰くような人の流れ。二人の後姿は瞬く間に混雑に紛れてしまつた……。

幻の商人

「ムーラン・ルージュ」の看板の赤い風車は、夜通しぐるぐる回つて、さすがに少々草臥れたか、舗道を染める赤電氣の色がめつきり淡くなつたと思つたは僻目で、実は、世間の倍も長いモンマルトルの夜が、いま白々と明け初めた

のである。

昨夜は聖カトリイヌの晩なので、どここの踊場もシャンパン・ボックスも一杯の入り。若い男女は思う存分踊り尽して、曉近く色紙の帽子を被ったまま、タクシーを拾って帰って行く後から、服だけはスモオキングを着た楽手が、眠むそうにヴァイオリン函を抱えて裏町へ消えて行つた。

モンマルトルの明方は、死んだ魚の腹のように白い。

とある横町の曲角、一軒の小さなキャフェがまだ起きてる。カウンターの大部分を占めて、椅子や卓はほんの二組、三組。恐らくこの界限で夜通し働く人々が、帰りに珈琲の一杯も立飲みしていくために、店を開けてるのだろう。芝居者らしい烏打帽子の男が、俯いて熱いシヨコラを啜っているだけで、外に客の姿は見えなかった。

そこへ、思い掛けなくも飛び込んできたのは、昨夜「赤風車」で見た例の組の男女である。男は煙草を買う積りで入ってきたらしく、一函貰つて出て行こうとするのを、女は引き止めて、

——あたし喉が乾きましたわ。

——でも、汚いですよ、こんな店。

男は不気味そうに周囲を見回したが、やがて隅のテーブルへ女を導いて、グレナディンと鉱水を注文した。

——こんな時間に帰って、家の方で心配しやせんです

か。

——聖カトリイヌの夜ですもの、大目に見てくれますわ。ですけれど、あたし……。

彼女はわざと横を向いて、一寸言葉を切つてから、

——あたし、こんなこと初めてですわ。あんなにシャンパンをお飲ませになるもんだから、つい酔つてしまつて、いつホテルなんかへ行つたんだか——

——あんな後悔されとるんですか。

——あら、後悔だなんて……。それどころか、あなたほんとにいい方だと思つてますわ。あんなに沢山頂いたんですから。今日は新しい帽子を買つて、仲間に見せびらかしてやりますわ。ああ、嬉しい。でも、じきにお別れしなきゃならないのね。

——なあに、あなたの都合さえよければ……。

——いいえ、どうしても帰らなければなりませんの。さつき申上げた通り、店を休むわけに行かないんですから。

——じゃあ、タクシーでお宅まで送りましょうか。

——いいえ、家はすぐ近くなんですから……。

——そんなら、その近所まででも。

彼女はちよつと眉を擡めたが、さあらぬ態に、手提を持つて立ち上つた。男も十フラン紙幣をコップの下へ敷いて店を出ると、居眠りをしていた給仕が、一目、テーブルを睨んでから「メルシイ・ムッシダアム！」

まだ人通りの少い往来を、二人は二、三町くねくね回り歩いた挙句、女はある素人家町の角までくると、

——じゃあ、ここでお別れしますわ。

——明日の夕方、きつとですぜ。

長い接吻を交わしてから、二人は左右に別れたが、男の方は時々後方を見返るので、彼女は家の扉の前へ立ち止まって、ベルを押した。もっとも恰好だけで、指先きはボタンに触れていない。男が投げキスをして、町角を曲ったのを見済してから、彼女は扉の前を離れて驚くような速足で、また歩きだした。また二つ三つ横丁を曲ると、さっきの家よりまた一段と汚い、見窄らしいキャフェが起きていた。つかつかと中へ入った彼女は、主人兼給仕の親爺に、馴々しい調子で聞いた。

——アルフレッドさんは？

——奥だよ。

奥の汚れたカーテンを開けると、瓦斯マンツルの青白い光りに照らされて、アルフレッドさんの仲間は、トランプの最中だった。

——なんだ、ベベか。いけ騒々しい、静かにしろい！

景気が悪いと見えて、アルフレッドさんの御機嫌がよくない。長いもみあげの横顔で、ちらと睨んだ眼付きの凄惨なこと——彼女は湯を掛けられたサラダのように萎んでしまった。

やがて一勝負済んだが、また負けたと見えて、ぐるりと此方を向いたアルフレッドさんの額は、一層陰悪である。

——いくら持ってきた？

彼女——即ち本篇の主人公ベベは、昨夜の男から貰った紙幣を、そっくりそのまま、アルフレッドさんに差出した。

——なんだ、これっきりか？ ちえッ、そもそも、だらしのねえ阿魔だなア！

どうして金額はなかなか不足な筈はないのだが、ベベは相手の不機嫌を宥めようと、優しく傍へ寄ろうとすると、——ああ、止してくんな、生憎、いま手が塞がってるんだ。

膠もなく、彼女は突き放された。憐れなるベベよ——そうされればされるほど、ベベはアルフレッドさんが離れがたくなるんだから仕方がない。

ベベは幻の商人である。モンマルトルへ彷徨つてくる多くの男は、それから女は、みんなそれぞれの夢と幻を買いにくるのだ。ベベの売るのは、既に諸君おわかりの筈。しかし、アルフレッドさんの売るのは何ぞかというと、これはひどくエッセンスアルな「幻の素」——即ち阿片、モヒ、コカインの類で、やはりこれも幻の商人。

しかしアルフレッドさんは元締である。卸元である。ベベの如き女や、また輩下の男は、セールス・メンバーと云

うのか、チェーン・ストアーと云うのか、まずそんな役回り。一々アルフレッドさんの指揮を受けて、幻の販売に従事し、売上高は一度元締の手へ返ってから、かなりいい歩合で配当を受ける。アルフレッドさんは遊ぶ事と怠けるのが大嫌いで、旧鐘紡の武藤さんとは反対に、厳格主義の旗幟の下に組合員を督励して、好成績をあげている。

ベベなんか引叩かれることも度々だが、アルフレッドさんは不思議な魅力を持って居て、怨むどころか崇敬の情をたかめる。尤もその魅力のうちに、コカインが隠れてることは事実である。麻痺剤の取締りが極端に厳重なフランスだが、アルフレッドさんの仲間に入っていれば決してそれに不自由を感じないからだ。

アルフレッドさんは、商売の暇を見て、ほんの少しばかり、ベベを愛してくれる。ベベは心底それが嬉しく、且つ光栄に思っている。幻の商人たるベベは、商品の一番いい処は取って置いて、アルフレッドさんに献げてるつもりでいるのだ。それはまごころには相違ないが、しかし、恋というものとは、ちよいとばかり、趣きを異にするだろう。

過去

ベベはいい棕鳥（くろどり）を捉えた。此間の「赤風車」（ムーン・カールズ）のお客は、メナアジュさんと云って、まだ独身ながら相当な商店

の御主人である。生来好人物のせいか、それとも色恋（ラブ・アフェール）に経験の少いためか、ベベがモンマルトルの女である事などは夢にも知らず、何処かの店で働く可憐な職業婦人だと思つて、それを手に入れた自分の手腕を、折りあらば人に誇りたいと考えていた。

その後のメナアジュさんは三日にあげず、ベベと逢つてゐるのだが、ランデ・ヴウの度毎に思ひは募る一方で、そうなるたびの方では桃色のセルロイドみたいなメナアジュさんの若禿の頭が、どうも馬鹿々々しく見えてならない。だが、こんなに気のいい、また気前のいいお客は滅多にないから、どうぞ永い御交際が願いたいものだ、ベベは心からそう祈つてゐるのである。

或る日の逢瀬に、二人はとあるホテルの一室に閉じ籠つて、もう一二時間経つてからのこと、

——あたしの昔話（おとぎばなし）し聞いて下さらない？

鬢のほつれを掻き上げながら、ベベはそういい出した。メナアジュさんに自分の過去を聞いて貰いたいというよりも、勤務時間の退屈を紛らす方便——いや、もうちつとプロフェッショナルな計略からである。

——や、それや面白い！聞かせ給え、聞かせ給え。

ベベのような職業の女に、両親の揃つた験しは滅多にないが、とりわけベベは父や母の顔さえ知らず、育ててく